

「我とそれ・我と汝 4」

～私についてきなさい～

ヨハネ 1 : 40 ~ 51

この場所は弟子たちがイエス様についていくシーンが描かれています。「我と汝」ということが語られるようになり、あなたの周りの人を見る目が「それ」から「汝」(出来事 価値観が本当のその人の本質を見出す)になってきているのでしょうか。自分のニーズを果たすためにしているのであれば完全に「それ」になっています。当時のイスラエルの人々は子供に「ルール」を守らせるために向き合っていました。今回の聖書の中に出てくるイスラエルの人々は、その考えの「強硬派」と呼ばれている人たちで、人々から離脱して生きていた人たちでした。そんな彼らにわざわざイエス様は出会いに行きました。田舎の漁師

田舎の哲学を言う人・・・世的には面倒くさい人たちはです。ペテロも熱心党員といわれる人で、今の人々のあり方に思いがあった人でした。イエス様はそんな人々にかかわったのです。ここから「父」というものを見たいのです。あなたにとってお父さんはどんな人でしょうか？よくも悪くも私たちの生き方のモデルが「父」にあります。「父親」は私たちにとって大きな土台となるように神様がつくりました。イスラエルの人々はお父さんをとても尊ぶのでその教えは「絶対」でした。そんな中であって、ペテロたちは自分の考えがあるのにも関わらずイエス様に呼ばれてついていきました。ナタナエル(バルトロマイ)という人もそういう人です。ナタナエルは強情でした。「ナザレから救い主は出ない」こんな哲学を強く持っていました。父の教えがそうだったからです。だから父の教えとは違うと思っていました。そんな彼が、兄弟にイエス様のところに連れられてこられる最中に、イエス様に「これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。彼のうちには偽りが無い。(ヨハネ 1 : 47)」と言われたのです。イエス様は世の中で間違っている人であって弟子とし、本質を見出そうとしました。出てくる弟子たちは、人々からしたらそんな立派な人たちではなく、どちらかという「ええ～」と思われ、父からまるまる影響を受けたそんな人たちでした。イエス様はその人たちの弱点を見抜いて、そこに長所を見出した・・・ここに意味があるのです。イエス様は向き合う生き方を彼らとしました。公生涯の3年間、イエス様が、興味があったのは立派な人ではなく、どちらかという「問題児」で、特にかかわったのは1人+αのわずかな人でした。人生の10分の1(33年のうちの3年)をどうでもよい、差別された、面倒くさい人たちと共に生きて、彼らを「ユダヤ人のユダヤ人だった」と言ったのです。父から受け影響をそのまま持った人たちが・・・まさに、今の私たちです。そんな私たちを通して神様は何かをしようとしています。私たちは父から受けた悪影響、傷から出ている悪いものをみんなもっていて、それを正しいと思って生きています。そんな悪いものを神様は「プラス」にしてしまうのです。なぜかという、父のもっていたものは、神様が代々に与えたものだからです。どんな最悪な父であったとしてもその中に、神様が与えた「最高傑作」な部分があり、私たちの中にちゃんと継承されているのです。しかしその「長所」は絶えず「短所」と隣り合わせで、使い方を間違えると「長所」が「短所」になってしまい、「短所」が暴走すると、私たちの人生を壊してしまいます。そんな私たちに神様は見える形になり、神の在り方を捨てて、「わたしについてきなさい」と言いました。ついていくと私たちの内側にある代々受け継がれた種として宿っているものが元気になってくるのです。

■ ①インサイダー or アウトサイダー

もっている良いものを内側(インサイダー)で用いようとせずに外側(アウトサイダー)から向き合おうとするとほとんどの場合、短所になります。たとえば人の問題を見出したとします。それは「気付く」という素晴らしいものですが、それを外側から見れば批評家になり、口にはだせば悪口を言う人になります。だからといって誰でも問題点に気付けるわけではないので、それはあなたの「賜物」であり、その人があなたと向き合うものでもあります。そして相手の問題点に感傷したということは、あなたの中にもその「問題点」があるのかもしれませんが。このように神様は人と人の出会いによって、その両者に「究極的な回復」を与えるのです。しかし、人は関わるのが面倒なのでアウトサイダーになりたいのです。代々「信じるな」「深く関わるな」「恥をみせるな」「涙を見せるな」こんなふうな言葉でできた私たちの間違った哲学は、私たちの人生に間違った結果を生み出します。そんな私たちのところにイエス様はわざわざ

行って「ついてこい」と言ったのです。でも私たちは失敗ばかりしまいます。そのとき間違っていることはわかっていますが、外側から客観的に見て自分を正当化してしまいます。自分が正しいと言いたいのです。「ちょっとはある」「あの人よりはある」・・・そんなふうには言いたいのですが、イエス様はそういう私たちの弱さを見抜いて、「ついてこい」といったのです。弟子たちはついて行ったら最後変わりました。彼らはイエス様を好きになったのでついて行ったのです。それはイエス様が自分の見てほしいところを見てくれたからです。神様は私たちの本当の見てほしいところを見ていて、本当の姿に導くためにあなたと一緒にかかわってくれています。だから失敗してもよいし苦しみがあってもよいのです。すべての営みに解決があるからです。私たちが決めるべきことが「ついていく」ということです。

■ ②狭い道～イエスについていく～

その道はとても狭いし普通ではありません。自分のことを、社会は外側からみて判断しているが、私たちは、それが本物でないことも知っています。ここ(教会)に来ると、私たちの本質をつつかれるので、面倒くさいし、疲れます。だけど外側で生きる人生は嫌だと思っています。だから何かが変わるのです。神様は私たちの人生を変えようとしています。

■ ③知る人生から信じる人生に(ヨハネ11章)

「イエスはこれを聞いて、言われた。「この病は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」(ヨハネ 11 : 4) この後ラザロは死にますが4日間、イエス様は彼のところに行きませんでした。そのあとでマルタとのやりとりが出てきます。「マルタはイエスに向かって言った。「主よ。もしここにいてくださったならば、私の兄弟は死ななかつたでしょうに今でも私は知っておりませぬ。あなたが神にお求めになることは何でも、神はあなたにお与えになります。」(ヨハネ 11 : 21・22) このとき、マルタにとってはイエス様が「イエス様」という「人」ではなく「それ」になっていました。神様が求めにこたえてくれる「特別な存在」としてイエス様を信じていたのです。イエス様を求めたのではなく「生き返らせてくれるイエス様」を求めたのです。「知っている」という言葉が出てきますが、彼女はイエス様のことを頭で理解し、会話をしていました。「イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」(25)するとイエス様はこのように怒ったのです。死というものは私たちにあっては絶えず悲しみであり苦しみですが、聖書ではこれを「益とする」と約束しています。そして死は死で終わりません。神様と共にいるものにとっては死もすべての問題もこわいものではありませんが、離れていると死が「恐怖」でしかありません。死の力が私たちの人生を絶えず支配しているからです。私たちは狭い門から絶えずこの「神の恵み」を見出す必要があります。信じる人生とはこのようなものです。見える神の恵みを見るから見えないものも信じられるのです。私たちが神様に出会って「見える神の恵み」を感じたのです。そして私たちにまだ先の「見えない恵み」がたくさんあります。それをどう受け取るかは信じるかどうかです。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみとりに来ることはありません。」(ヨハ 14 : 6) そして信じるなら神の栄光を見るのです。信じましょう。そして信じたら、「イエスの人生は死を背負う人生」であるということ、意思と決断をもって確信しなければいけません。イエス様は私たちが「死」に脅かされないようすべての人の「死」を負いました。そして私たちがとって大切なのは生き様です。パウロとルカは最後牢屋に入れられ死刑になります。しかし彼らはその時の宦官の娘をいやし、その宦官はクリスチャンになりました。神のなさる事とはそういうものです。その時の生き方で私たちが正しいと思っていることが正しいとは限りません。イエス様についていけないと、私たちは正義の名のもとに失敗してしまいます。「働きよりも備えを選ぶ」「言葉よりも沈黙を選ぶ」このイエス様の生き方は私たちのモデルです。私たちの視線をイエス様に戻し、そんなイエス様についていきたいと思います。

(要約者:岩崎 祥誉)

(2018年12月9日)